

## 『筆者の工夫を評価する説明的文章の指導』

本書は、著者のこれまでの精緻な研究成果である、「認識主体を育てる説明的文章の指導」（溪水社、一九八四年）、「説明的文章の研究と実践」（明治図書、一九八八年、編著）の延長線上に位置づけられるものである。

著者は、冒頭において、説明的文章指導について次のように定義している。

「国語科における説明的文章の指導は、複雑、多様な情報が混在する現代を、認識の主体としての自己を見失うことなく生きぬく力を身につけることを目的とするものでなくてはならない。こうした力をつける読みの指導を『筆者の工夫を評価する読み』（あるいは『評価読み』）の指導と呼びたい。」（まえがき 一頁）

こうした意図に基づき考究された書の構成は、次の通りである。

まえがき

I 説明的文章の特質と指導の意義

II 説明的文章の教材研究

III 指導過程、指導方法の工夫

IV 教材研究と授業の実際

— 初めての読み（小学校教材「みつばちのダンス」の場合） —

V 実践事例の検討

— 筆者の個性の理解と評価（中学校教材「ラスコー洞窟の壁画」の場合） —

VI 教科書の研究（一）

— 説明的文章教材と原典の関係 —

VII 教科書の研究（二）

— 説明的文章単元編成の実態と問題 —

あとがき

著者は、従来までの説明的文章の読みが叙述に即した「確認読み」中心であった点を指摘し、筆者の工夫を吟味・評価する

「評価読み」の必要性を説いている。

著者は、「評価読み」について次のように述べている。

「筆者はことがら・内容の取り上げ方に際して、これこれの工夫をしているが、その工夫はなぜなされたのか、工夫は成功しているのか、問題はないのか。筆者は説明的論理の構築に際して工夫をしているが、その工夫には矛盾はないか。その工夫のおかげで、説明の対象となっている事象が十分に説明されているのか。筆者は、ことば選別に際して工夫しているが、その工夫は効果があるか。総じて、筆者の工夫は、説明の対象である事象の本質の解明に成功しているのかどうかを問う読みが必要になってくる。さらに、工夫を問う読みの過程で生じた疑問、問題を解決する読みである。」

〔傍点は引用者〕（四一頁）

著者は、既存の説明的文章の定義と指導法の問題点を明らかにすることにより、筆者の工夫を吟味・評価する読みの指導を導き出している。さらに特筆すべき点は、説明的文章指導の理論的究明に留まらず、指導方法・実践事例・教科書研究という実践

的究明にまで論を展開していることである。

本書は、説明的文章指導の本質を、明確かつ緻密な切り口で捉え、理論と実践の両面から洞察したものであり、今後の国語教室に大きな示唆を与える一書であると言え

る。  
(A5判、二二九頁、一九八九〔平成

元〕年二月、明治図書刊、二、一〇〇  
頁)

(大塚 浩)